

ラブ・フォーティ

テニスに魅せられて 徳弘晴輝

地方からの挑戦 ⑳

私は何人かの素質のあるジュニアを、小学生のころから指導していましたが、彼らは中学または高校から、県外の伝統校にテニス留学をしました。初めのころは私自身も、それが当たり前とっっていました。

私が始めて育てた子供は当時介良小六年生であった岩神典子さんでした。彼女が春野のコートで、小学生大会の優勝戦を戦っている所を見て、「これはいい素質を持っている」と感じて、その場でお父さんと本人に、一宮で一緒に練習をしようと言ったのでした。

それからは毎夜のようにマンツーマンで指導し、その後は京都ジュニアサーキットで準優勝し、全国中学生選手権大会や、全日本ジュニアで活躍しましたので、プロになった伊達公子さんの居た、園田学園高校から誘われて進学して行きました。

次に私が手塩に掛けて育てたのが、宮崎・中越姉弟です。中越のお姉さんの由紀さんも、本人の希望と、前記岩神さんの誘いもあって、中学校から園田学園に進学しました。伊達選手を育てた故光国監督が「岩神も中越も基本が出来ているから、そのまま伸ばせば良い」と言っていたそうです。また、伊野町の山脇実さんの三兄弟も一宮クラブでお父さんが育てましたが、上の二人が大阪の清風高校へ進学しました。

宮崎君と中越君は、中学時代に既に全国レベルの実力を備えており、宮崎君は全国中学選手権大会で準優勝の実績がありましたので、関東、関西、九州の伝統高から、引く手あまたで、特待生扱いの誘いもありました。

しかし彼らが高校三年生になった年に、高知でインターハイがあり、また大学四年生のとき、高知国体があることが決まっていたので、なんとか高知にとどまってくれないかと思っていました。だが高知にとどまるとなると問題が二つありました。一つは私が卓球時代に味わった、いわゆる「全国の壁」です。彼らの練習相手と指導者をどうするかということです。私が教えられるのは、基本ぐらいのものですから、世界にも通用する指導者を探さなくてはなりません。

これについては、インターハイを目指して、県テニス協会の強化事業が始まり亜細亜大学の堀内監督（日本のナショナルチームの監督をたびたび務めた）に指導を受けられることになり、問題はなくなりました。

もう一つは、どの高校へ進学するかの問題です。中越君は、高校は高知に残り、大学は県外と決めていたのですが、宮崎君の場合はプロを目指していたので、テニス一筋に高校を卒業するとすぐプロになるのか、それとも大学を卒業してから、プロになるのかによって、進学する高校の選択が変わってきます。

私はプロでも30歳が体力の限界だから、それから先の長い人生のことを考えると、やはり学問はしっかりやっておいた方が良いと思っていました。宮崎家でも私と全く同じ考えで、高知に残ることに決めたのです。「ではどこの高校へいくか？」となりました。

これは私の経験から割り出したことですが、テニスの強い伝統校には、テニスの技はコーチに任せておいて、自分は教育者の立場で、情熱を傾けて生徒を支えている先生が必ず居るのです。私は妻にそんな先生が土佐塾高校に居ると聞いていました。それが「明神千加」先生です。当時の土佐塾高校は市営コートでも練習をしており、そこに勤務していた妻が「明神先生は自分がコートの予約や支払いに来て、練習日には必ずコートに立ち、声を出して生徒を励ましていた」と言っていました。そこで私は、集中力のある宮崎君が、その気になって勉強すれば、進学校でも十分やっていけるのではと思って、受験を勧めたのです。